

<前回・バルト1・『教会教義学』以前>

(1) 弁証法神学の意義

2. 現代神学の発端 (自由主義神学・神秘主義批判)、『時の間』

バルト、ブルンナー、ブルトマン、ゴーガルテン、トゥルナイゼン、メルツなど。

近接して、ティリッヒ、ボンヘッファー、ニーバー兄弟など。

↓

1920年代から60年代にかけて、プロテスタント神学の主潮流を形成する。

ラーナー、バルタザールなど、カトリック神学への影響。

日本：高倉徳太郎、熊野義孝、桑田秀延、滝沢克己ら、そして次の世代へ。

cf. 1980年代以降の自由主義神学の再評価の動向

バルトらの弁証法神学の批判的検討の必要性

(2) バルト神学

バルト神学自体をキリスト教思想史の中に位置づけ解釈する作業。

4. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学 (自由主義神学) に対する徹底的な批判 (戦争神学批判) とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

・フォイエルバッハの宗教批判 (神学は人間学である) の真理性。

・神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

↓

ハルナックとの論争、神学の学問性をめぐって

19世紀の自由主義神学における学問的神学の基盤としての歴史学

1910年代から1920年代の学問論争の一端 (客観的な学的体系か生か)

5. 宗教社会主義運動 (スイス)、弁証法神学 (危機神学、新正統主義、神の言の神学) の運動——ブルトマン、ブルンナー、ゴーガルテンら——

6. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機 → 危機神学

・キルケゴールのモチーフ

・ヴァイスとシュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見の影響

終末論、しかも現在的終末論の強調。

7. 歴史神学の後退。

歴史神学は必要ではあるが、「補助学」(Hilfswissenschaft)に過ぎない。

「弁証法神学の問題点は、知られざる神自身は歴史のどこにも入らず、ただ有限者に「触れる」だけである、というバルトの解釈にある。」(森田、290)

4. バルト2——『教会教義学』を中心に

1930代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言

・弁証法神学を超えて、『教会教義学』(KD、「神の言の神学」)へ

・教会闘争、自然神学論争 (ブルンナー)

自由主義神学と弁証法神学との対立から、本来の神学的思惟へ

神を投影する人間の想像力の汚染を脱却した神学構築の試み

(1) 『教会教義学』の方法と体系

1. アンセルムスの発見。

『知解を求める信仰』(*Fides quaerens intellectum: Anselms Beweise der Existenz Gottes im Zusammenhang seines theologischen Programms*, 1931.)

- ← アンセルムス『プロスロギオン』、存在論的神の存在論証
 - ← アウグスティヌス「理解するために信ぜよ（信じる）」（Credo ut intelligam）
- 神観念（「これ以上大きなものが考えられない或る者」）から神の現実存在へ
心の内と外？、大きさ？
2. 知解を求める信仰：信仰固有の、信仰自体が可能性として内包するラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。
- 神・啓示から。榑円（シュライアマハー）に対する円＝キリスト論集中。
「信仰と理性」に対して「信仰から理性」
- 神の啓示と信仰が接続するのが、「キリストの出来事」であり、その認識根拠は聖書的テキスト。
3. 宗教と啓示との峻別：フォイエルバッハ問題への解答の一環
宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、
不信仰としての宗教
4. 神の言葉の神学としての教会教義学
神の言葉（啓示）の三一性：神の第二位格＝キリスト／イエス、聖書、説教
↓
神学体系の基本構造としての三一性
5. 福嶋揚『カール・バルト 破局のなかの希望』ぶねうま舎、2015年。
「バルトの主著『教会教義学』」「未完の思想的「運動」」「その厩大な著作群を貫く、最
初期から晩年期まで変わることのない、バルトの「死生観」」（16）
「筆者は、バルトの死生観がまさしくこのイエスの逆説的な死生観と共鳴し一致するもの
だと考える」（17）
「「死」を通してのみ開かれる「生命」へと向かう逆説的運動」「永遠が時間に接する各
瞬間において生起するという」（22）
「「永遠が時間になる」「永遠は時間を排斥する無時間性ではなく、時間との間に、不可
逆・不可分・不可同な秩序を保ちつつ、時間へと生成することが、この逆説の内容である」
「ロゴスとは自らを開示し伝達するものである」、「開示と隠蔽との二重の性質を持つ」（23）
「バルトの思想は、十字架につけられたキリストへの集中、キリスト論的集中によって方
向づけられている」（24）
「信と知の循環」「絶対主義と相対主義の狭間をゆくキリスト教思想」
「バルト神学を源泉へと向かう面と、外側へと向かう面の両面から捉える」（26）
「源泉へと向かうバルト」「根源にある「福音」」「福音主義神学」（26）
「時間は空間と並んで人間の「実存形式」」（45）
「ユンゲル」「時間と死は共に、人間存在の不可欠の構成要素でありつつ、同時に解体の
危機そのものでもある」（46）
「西洋の哲学と神学においては、人間存在の時間性と、その彼岸にある永遠とを分離して
対置する根強い傾向が見られる」
「補論 神論の中の永遠論」「神の現実性」「とは、「神の存在と行為の一体性」」（48）
「「時間と空間の対立というバビロン捕囚」」（50）
「バルトの時間論」「永遠を古典的な三位一体論を用いて表象し、それによってキリスト
教的な永遠概念の固有性を明確化したこと」「聖書の適切な解釈」（53）
「神とは啓示の出来事の主語であり、述語であり、目的語である」、「相互浸透と充当」（55）
「前時間性」「超時間性」「後時間性」（57）

「ボエティウスの永遠理解においては、時間の三様相の同時存在に力点が置かれていた。しかし三位一体論的な永遠は、不可逆的方向性を持つという点では、後時間性により力点が置かれる。」(60)

「永遠とは、人間存在の根本構造である時間性に対して、不可分、不可同、そして不可逆の関係にありつつ、それを根底において成立せしめるア・プリオリなものである」、「自己を超えて異郷へ赴き、出会いを創造するような、脱自的な運動性を持つ」

「永遠は、神の「内側へ向かう自由の原理」「時間は、神が「外側へ向かってなす自由な行為の、形式的原理」、前者は内在的な三位一体であり、後者は経綸的な三位一体である。」(61)

「神の自己関係」(62)

「人間が永遠へ向かう態度を「瞑想」(62)

「改革派」「永遠は時間と関係づけられることによって、倫理の問題となる」(63)

「時間はすでに贈り与えられた機会」「根源的な贈与への応答」「神と人との契約といふ原関係に対応して、時間と空間は関係性の実現の場となる」、「神的永遠が現臨する瞬間や、それに対する人間の応答的決断の時」「カイロス」(64)

(2)『教会教義学』再考

6. バルトと自然神学

バルトとブルンナーにおける自然神学論争(1934年)とは何だったのか。

純粹的な神学の方法論的議論だったのか。

7. 自然神学論争のコンテクストとしての教会闘争

A・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年(原著、2008年)。

「バルト—ブルンナー論争が生じた一九三四年は、アドルフ・ヒトラー」がドイツで独裁政権を掌握した年でもある。ブルンナーが自然に訴えたことの根底には、ルターにまで遡ることのできる、「創造の秩序」として知られる考え方があり、「バルトの関心の一部を占めていたのは、国家を神にとってのモデルとするための神学的基盤を、ブルンナーがおそらく無意識のうちに築いてしまった、ということであった。」(218)

波多野精一『宗教哲学序論』第二章—バルトとブルンネル(1940年)

(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年、67-83頁)

8. バルトから何を受け継ぐか。

キリスト教神学とは如何なる学問か。

神と学とのキリスト教(生→人間)における緊張

9. トランスのバルト論：バルト神学において自然神学は場を持つ。

トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990年(原著、1980年)。

「神学の成層構造」「この成層構造は、三一論が神学全体の明確化と単純化が遂行される究極的な統一論的基礎を構成している」(6)

「神は創造において被造物と人間に与えた合理性の諸様態の内でご自身を啓示された」、「この宇宙を理解することは現代の自然科学的探究の主要目的であるが、これは神学にとっても深い関心事とならざるをえない」、「神学的科学と自然科学との相互関係」(13)

「唯一の基本的な認識方法」(22)、「認識しようとする實在に忠実でなければならぬ、また常に實在への冷徹なまでに忠実に関わりながら、行為し思惟しなければならぬ、

「両科学は一つの基礎的方法論をそれぞれの領域に適用したもの」「調和し合うように努めねばならない」(23)

「単に分析的にすぎない科学の偉大な時代は、今や終わろうとしている」(24)

「アインシュタイン」「キリスト教神学では、この段階は、すでに四〇年前にカール・バルトによって到達されていた」(25)

「科学は、いかなる分野であれ、事物の独立した実在性に強制されて、事物の内的な本性に統制的に関係づけられる、事物の認識であって、事物の内的な諸関係に照らして定式化されるものなのである」(30)

「アタナシオス」「自然神学」と見なされるような議論を設定したのは、まさに創造と受肉についての統一された神学的理解の範囲内であった、「神認識と世界認識とが、創造者なる神にロゴスあるいは合理性の内に同一の究極的基礎を共有する」(105)

「バルトが伝統的自然神学に対して反対しているのは」「その合理的構造ではなく、その持つ「独立的」という性格、すなわち自然神学が生ける三一の神の能動的な自己開示から抽象化し、「自然のみ」に基づいて展開する自律的な合理的構造なのである」、「その合理的構造が神認識の現実的内容と本質的に結合されるのでなければ、それは歪曲的な抽象化である、という主張」、「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」(121)

「幾何学は物理学の核心部に位置づけられる」(123)

「自然幾何学が動的で実在論的な物理学のなかに組み込まれている時空構造であるのと同様に、自然神学は動的で実在論的な神学のなかに組み込まれている時空構造なのである。」(124)

「神学的科学と自然科学との間には、本来的意味での「自然な」連関が存在する」(125)

「アンセルムス」「知解可能性と存在と統一は、あらゆる被造的実在を特徴づけるものである」(132)、「存在論的論証は被造的世界と知解可能性からではなく、神の至高の存在と、自己同一的知解可能性がアンセルムスに押し迫ってきたのであった」、「自然神学といわゆる啓示神学との内的連関」「祈りの文脈」(133)

10. まとめ

(1) フォイエルバッハ宗教批判（近代的思惟）へのキリスト教神学の応答の一つの典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

フォイエルバッハ問題は終わらない。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化 → バルト主義の弊害

バルトとバルト主義との相違

(6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

↓

近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

<参考文献>

0. バルト関係：『カール・バルト著作集』『教会教義学』新教出版社。
『バルト・セレクション』（全7巻）新教出版社。
1. ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻3）白水社。
2. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
3. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
4. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社。
5. J・R・フランク『はじめてのバルト』教文館。
6. 大木英夫『バルト』講談社。
7. ユンゲル『神の存在 バルト神学研究』ヨルダン社。
8. トーランス『バルト初期神学の展開』新教出版社。
9. 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』『恩寵と類比 バルト神学の諸問題』新教出版社。
10. 吉永正義『神の言葉の神学 バルト神学とその特質』新教出版社。
11. 佐藤司郎『カール・バルトの教会論 旅する神の民』新教出版社。
12. 福嶋揚『カール・バルト 破局のなかの希望』ふねうま舎。
13. 芳賀力『神学の小径』（全5巻）キリスト新聞社。